

〔研究報告〕

父親のボンディング構成要素の探索的研究

鈴木 大地^{1)*} 五味 麻美^{2) 3)} 大橋優紀子^{4) 5)}

要 旨

本研究は、日本の父親における胎児期および乳児期のボンディングの構成概念を明らかにすることを目的として実施した。ボンディングは、従来母親を対象とした研究が中心であり、父親特有のプロセスや構成要素についての研究は限定的である。特に、父親のボンディングは母親の尺度や概念が転用される場合が多く、その定義や測定方法において一貫性を欠いている。本研究では、インターネット調査を通じて、パートナーが妊娠中または2歳未満の子どもを持つ180名の父親から自由記述形式のデータを収集し、内容分析を実施した。その結果、父親のボンディングは【わが子の認識と自分ごととして捉えることの難しさ】、【わが子を認識し親としての責任を覚える】、および【愛情と喜び】の3つの大カテゴリーに分類された。なかでも、〈特にない〉や〈まだ実感がない〉といった実感の欠如を示す回答が多い一方、〈親である自覚と責任〉や〈愛おしい〉といったポジティブな要素も顕著であり、父親特有の複雑な感情構造が示された。本研究の結果は、父親のボンディングが母親のそれとは異なる独自のプロセスを経ることを示唆しており、早期からの父親支援や児との関わりを促進する取り組みの必要性が示された。また、既存の母親基盤の尺度では捉えきれない父親特有の構成要素を明確にすることで、父親支援における新たな視点を提供するものである。

キーワード：父親のボンディング、構成概念、内容分析

1. 緒 言

ボンディングとアタッチメントという用語は日本語ではどちらも愛着として訳され、混同して用いられることが多いが、Klaus and Kennell (Klaus, Kennell, 竹内, 柏木, 横尾訳, 1985) はボンディングとは子どもと親の愛情の相互作用ではなく、親の子どもに対する愛情や関心に関する現象であると定義している。このボンディングの問題としてボンディング障害があり、子どもへの希薄な関わりや子どもの虐待にもつながるということが明らかになっ

ている (Ohashi, Sakanashi, Tanaka, et al., 2016)。

ボンディングに関する研究は母親の研究が先行し、父親のボンディングの研究は母親を対象とした研究よりも少なく、その多くが両親と子どものボンディングに関するものであり、父親のみを対象としたボンディングの研究は限定的である (Suzuki, Ohashi, Shinohara, et al., 2022)。一般論として、bondとは、親から子への結びつき (tie) であり、一方愛着 (attachment) という用語は、反対方向の子どもから親への結びつきを意味するとされている (Klaus, Kennell, 竹内他訳, 1985)。すなわち、それぞれ、親から子へ向かう態度と、子どもが親に向ける態度というように、本来的には主体と方向性が異なる現象であるにもかかわらず、厳密に使い分けられず、用いられていることも多くみられる。ま

1) 神奈川工科大学健康医療科学部看護学科

2) 川崎市立看護大学看護学部

3) 川崎市立看護大学大学院看護学研究科

4) 城西国際大学看護学部

5) 城西国際大学大学院健康科学研究科

* 現在 聖路加国際大学大学院看護学研究科

た父親のボンディングに関する研究の多くは、父親のボンディングの定義として母親のボンディングの定義をそのまま用いて説明しており、ボンディングとアタッチメントを混同して説明していることもある。父親のボンディングの概念に関するスコーピングレビュー (Suzuki, et al., 2022) からは、父親独自のボンディングを定義しているものは限定的であったうえ、「父親が新生児に対して愛着を形成するプロセス (Taubenheim, 1981)」, 「父親のボンディングとは非常にシンプルであり「良いものである」という肯定的な反応 (Brady, Stevens, Coles, et al., 2017)」, 「父親と子どもとの感情的なつながりや心理的な結びつき (Habib, Lancaster, 2006)」, 「父親から子どもへの感情の移入 (Figueiredo, Costa, Pacheco, et al., 2007)」, 「子どもに関する態度や信念というよりも、胎児に対する愛の主観的な感情状態であり、男性 (および女性) の早期育児経験の中核をなすものである。子ども (胎児) について考えるときの感情的経験の性質を指すきずなの質と、胎児への思い入れの強さである (Habib, Lancaster, 2005)」, 「父親のボンディング自体が父親であることの明確で潜在的に重要な要素である (Habib, Lancaster, 2005)」などと様々に定義されていた。なかには、「父親の価値や信念との相互作用 (de Montigny, Larivière-Bastien, Gervais, et al., 2018)」や、「新たな父親役割」「感情」「感謝」といった多次元複合的な父性 (Furukawa, Driessnack, Kobori, 2020)」として、愛情を超えて行動的、認知的要素を含んでとらえられていた。これらのように、父親のボンディングの定義は多岐にわたるが、統一された定義は見受けられず、未だその概念についても明らかにされていない (Suzuki, et al., 2022)。

さらに、ボンディングまたはアタッチメントに関する測定尺度をまとめた系統的レビュー (Wittkowski, Vatter, Muhinyi, et al., 2020) では、父親と子どもの関係性を評価する尺度として、Paternal-Fetal Attachment Scale (PFAS) (Weaver, Cranley, 1983), Paternal Antenatal Attachment Scale

(PAAS) (Condon, 1993), Korean Paternal Fetal Attachment Scale (K-PAFAS) (Noh, Yeom, 2017), Paternal Postnatal Attachment Scale (PPAS) (Condon, Corkindale, Boyce, 2008) が挙げられている。これらの尺度は、母親の尺度が先行して開発されており、父親と胎児の愛着形成に関する研究が十分に実施されていなかったこと (Weaver, Cranley, 1983), 父親も胎児に対して愛着を育む可能性があること (Condon, 1993), 父親の愛着障害を信頼性と妥当性のある方法で評価する必要があること (Condon, et al., 2008), さらには独自の文化的な概念を考慮する必要があること (Noh, Yeom, 2017) などを背景に、父親のボンディングの特異性に注目した尺度の開発が行われている。

このように、父親のボンディングに関する研究は様々な定義や尺度を使用して実施されているものの、統一された定義や尺度を用いて実施されておらず、解釈も多岐にわたる。さらに、父親のボンディングの構成概念も未確定であることから、真に父親のボンディングを測定できているかは不明である。またK-PAFASのように、既存の尺度ではその国独自の文化的な背景を考慮できないため、独自の文化に合わせた測定ができる尺度の開発も実施されているが、限定的であることから (Suzuki, et al., 2022), 真に父親の文化的背景や価値観を尊重したボンディングの測定ができていない可能性がある。

そのため、本研究は日本の父親のボンディングの構成概念を、父親自身から表出された語句を基盤に明らかにすることを目的としている。これまで明確になっていなかった父親のボンディングの構成概念を明らかにすることで、父親自身が抱いている感情と困難や苦悩を把握することができ、今後の父親支援に活かすことで、将来的な子育て支援につながることを期待している。

II. 方 法

1. 用語の操作的定義

本研究では「父親」はパートナーが妊娠中または現在子どもを養育している男性とした。また「ボンディング」については自身の子どもの思い浮かべたときにわいてくる、父から子への特別な思いとした。

2. 研究デザイン

本研究は、日本における父親から子どもへのボンディングを表す語句を父親・母親への調査から抽出し、日本の父親のボンディングの概念を探索することを目的としている。そのため、本研究ではインターネット調査による質的記述的研究デザインを用いて、対象者の言葉で、ボンディングを表す語句を調査した。本研究は研究対象者から収集したデータの内、父親180名の自由記述回答を分析した第1報である。

3. 研究対象者

研究対象者はパートナーが妊娠中、または現在2歳未満の子どもを養育中の男性180名を対象とした。対象者の選定に当たっては、18歳以上の成人であること、対象者自身の成育環境が日本国内であり日本語による読み書きが問題ないこと、スマートフォンやパソコンを用いてアンケートに回答できることを適格基準として設定した。

4. データ収集方法

データ収集はインターネットリサーチ会社（以下、調査会社）へ委託し、実施した。調査会社のモニターパネルは、全国に488,254人であった。その中から、対象者の年齢や子どもの養育またはパートナーの妊娠の有無、成育環境などによるモニターのスクリーニングを実施し、本研究の対象に該当するモニターのみ、本調査への回答へと進むように設定した。回答は調査会社より、個人情報を含まない匿名化のデータとして受け取り、個人の特定が行えないようにした。

またインターネットリサーチの性質上、回答時間

が極端に短いものなど、回答への信頼性が疑われる場合は対象者から除外した。

5. 調査内容

調査内容は対象者の基本属性として、「年齢や性別」「学歴」「世帯年収」「養育環境」などについてとし、また「婚姻歴」や「パートナーの妊娠週数または子どもの月齢・年齢」「子どもとの関係」などの子どもに関する項目についても回答を依頼した。そして父親のボンディングとして、「ご自分のお子さんに抱く思い（感情や考え、つながり）を表す単語や簡単な文章を、思いつく限り、いくつでも自由に教えてください」という設問に対して、自由記載でデータを収集した。子どもが複数人いる場合にはそれぞれの子どもに対して回答を依頼した。

6. データ分析方法

基本属性に対しては記述統計による単純集計を実施した。ボンディングに関する自由記載項目については文章・単語の意味毎にコードを生成しカテゴリー化を行い、内容分析を実施した。内容分析の手法にはいくつかの方法があるが、筆者らはBengtsson (2016) を参照に、Krippendorffの内容分析の手法 (Krippendorff, 2018) を参考にした。分析には研究者間で、収集した語句の意味を回答者の特性や前後の文脈、または先行研究の結果からその言葉が意味している内容を確認し、類似した意味に分類した。分類後、元データに戻りながら、単語の意味の確認を繰り返し、カテゴリー化を実施した。カテゴリー化実施時には、収集したデータを研究者間で注意深く確認しながら、合意形成を行い、カテゴリーの命名を行った。また分析についてはボンディングの専門家と質的研究に長けている博士号取得者のスーパーバイズを受け、収集したデータを注意深く確認しながら研究者間で合意が得られるまで検討を重ね、カテゴリー化した内容の信用性と妥当性の確保に努めた。

7. 倫理的配慮

本研究は神奈川工科大学ヒトを対象とした研究に関わる倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認

番号：第20231011-01). 研究対象者へは研究の意義と目的, 研究の方法, 個人情報取り扱いと匿名性の保持, 情報の管理, 回答の中断や, 回答終了後にも同意の撤回が可能であることなどを記載した説明文書をweb上にて提示し, 研究参加へのチェックを以て, 研究参加への同意があるものとした. 同意撤回は, 本人の希望があった場合とし, 同意を撤回する場合には調査会社に設置した相談窓口へ連絡の上, 同意撤回書の提出を以て同意を撤回することとした. 委託会社とは個人情報管理責任者を設置し, データの扱いに関するガイドラインを定めている会社を選定し, 業務委託の申込ならびに承諾を以て契約を実施した.

III. 結 果

1. 基本属性

対象者および回答対象となった子どもの基本属性を表1に示す. 対象者は180名であり, 年齢は平均 36.9 ± 6.4 歳 (24~61歳), 50代以上が6名 (6.4%) 含まれていた. また180名の内136名 (75.6%) が子どもの養育歴があり, 44名 (24.4%) の父親は, 現在パートナーが妊娠中の子が第1子目であった. 子どもの年齢は胎児期が97人 (48.3%), 0歳から1歳までが65人 (32.3%), 1歳から2歳までが39人 (19.4%) であった.

2. 父親のボンディングを構成する語句とカテゴリー

収集した自由記述から, ボンディングが語られていた216のコードを抽出し, 26のカテゴリー, 8の

表1. 対象者の属性 (n = 180)

項目	平均 $\pm$ SD	範囲	人数 (%)
年齢 (歳)	36.9 ± 6.4	24~61	
学歴			
中学校卒業			1 (0.6)
高等学校卒業			21 (11.7)
専門学校・短期大学卒業			23 (12.8)
4年制大学卒業			95 (52.8)
6年制大学卒業・修士課程修了			20 (11.1)
博士課程修了			20 (11.1)
その他			0 (0)
世帯年収			
100万円以下			4 (2.2)
100万円超 300万円以下			1 (0.6)
300万円超 500万円以下			37 (20.6)
500万円超 700万円以下			52 (28.9)
700万円超 900万円以下			33 (18.4)
900万円超 1,000万円以下			12 (6.7)
1,000万円超			41 (22.8)
本人の成育環境			
日本国内			180 (100)
婚姻状況			
未婚			5 (2.8)
既婚			174 (96.7)
離別			1 (0.6)
子どもの養育歴			
あり			136 (75.6)
なし			44 (24.4)
パートナーの妊娠			
あり			96 (53.3)
なし			84 (46.7)
子どもの人数			
1人			89 (49.4)
2人			71 (39.4)
3人			17 (9.4)
4人			2 (1.1)
5人以上			1 (0.6)
子どもとの関係			
血縁あり			206 (99.5)
血縁なし (連れ子)			1 (0.5)
子どもの年齢区分			
胎児期			97 (48.3)
0歳から1歳未満			65 (32.3)
1歳から2歳未満			39 (19.4)

中カテゴリー、3の大カテゴリーを生成した。生成したカテゴリーと頻出語句は表2に示す。頻出語句については、同じ対象者の同じ言葉は複数回カウントしておらず、頻度として記載している。各カテゴリーについては以下に【大カテゴリー】、《中カテゴリー》、〈カテゴリー〉、「生データ」として記述する。【わが子の認識と自分ごととして捉えることの難しさ】は《特別な思いがわいていない》、〈特になし〉〈まだ実感がない〉の1つの中カテゴリー、2つのカテゴリーによって構成されていた。【わが子を認識し親としての責任を覚える】は《わが子の特徴と成長を受容する》、〈わが子の成長や反応に感情がわく〉〈わが子の特徴を認識する》、《わが子の幸せを願う》、〈何事もなく生まれてきてほしい〉〈健康な人生を歩んでほしい》、《パートナーの身体を通して胎児を気遣う》、〈パートナーの身体の変化を通じた気づき〉〈母子の健康を願う》、《親である自覚と責

任》、〈不安〉〈親としての在り方を考える〉〈父親としての役割・責任〉〈自分とわが子のつながりを感じる〉の4つの中カテゴリー、10のカテゴリーによって構成されていた。【愛情と喜び】では《期待と喜び》、〈会える日をまちわびる〉〈わが子の性別に基づく期待〉〈わが子のイメージを描く〉〈誕生への喜び〉〈楽しみ〉〈嬉しい〉〈希望》、《愛おしく思う》、〈かわいい〉〈大好き〉〈愛おしい〉〈愛》、《唯一無二の存在を感じる》、〈幸せ〉〈わが子は特別〉〈かけがえのない存在〉の3つの中カテゴリー、14のカテゴリーによって構成されていた。最も頻度の多い語句によって構成されたカテゴリーは〈特になし〉と〈かわいい〉であった。またカテゴリーのうち〈何事もなく生まれていてほしい〉〈パートナーの身体の変化を通じた気づき〉〈母子の健康を願う〉〈親としての在り方を考える〉〈会える日を待ちわびる〉〈わが子の性別に基づく期待〉〈わが子のイメージを描

表2. 父親のボンディング構成するカテゴリーと頻出語

大カテゴリー	中カテゴリー	カテゴリー	頻度	%	順位
わが子の認識と自分ごととして捉えることの難しさ	特別な思いがわいていない	特になし	39	17.3	2
		まだ実感がない	9	4.00	10
わが子を認識し親としての責任を覚える	わが子の特徴と成長を受容する	わが子の成長や反応に感情がわく	4	1.78	14
		わが子の特徴を認識する	10	4.44	6
	わが子の幸せを願う	何事もなく生まれてきてほしい	10	4.44	6
		健康な人生を歩んでほしい	14	6.22	3
	パートナーの身体を通して胎児を気遣う	パートナーの身体の変化を通じた気づき	3	1.33	17
		母子の健康を願う	2	0.89	20
	親である自覚と責任	不安	6	2.67	11
		親としての在り方を考える	3	1.33	17
		父親としての役割・責任	10	4.44	6
		自分とわが子のつながりを感じる	4	1.78	14
愛情と喜び	期待と喜び	会える日をまちわびる	5	2.22	12
		わが子の性別に基づく期待	3	1.33	17
		わが子のイメージを描く	2	0.89	20
		誕生への喜び	2	0.89	20
		楽しみ	8	3.56	10
		嬉しい	2	0.89	20
		希望	1	0.44	25
	愛おしく思う	かわいい	40	17.8	1
		大好き	2	0.89	20
		愛おしい	14	6.22	3
		愛	4	1.78	14
	唯一無二の存在を感じる	幸せ	1	0.44	25
		わが子は特別	5	2.22	12
		かけがえのない存在	12	5.33	5

く〉〈楽しみ〉〈嬉しい〉〈希望〉〈愛〉の11のカテゴリーは胎児期の父親からの回答のみで構成されていた。

【わが子の認識と自分ごととして捉えることの難しさ】

この大カテゴリーでは《特別な思いがわいていない》、〈特になし〉〈まだ実感がない〉の1つの中カテゴリー、2つのカテゴリーが含まれていた。〈特になし〉に該当する回答は胎児期・乳児期の双方の父親から見られており、第1子目だけでなく第2子、第3子の父親から見られていた。胎児期だけではなく、実際に産後の自分の子どもと対面した後の父親であっても、自身の子どものに対する特別な思いが「なし」や「特になし」と回答していた。〈特になし〉〈まだ実感がない〉のいずれのカテゴリーも、胎児期・乳児期双方の父親の回答が含まれているが、〈まだ実感がない〉では大半が胎児期の父親からの回答であり、「現時点ではあまり特別な感情はなし」や「まだふんわりとしか感じていない」「まだ実感がない」といった回答が見られていた。一方で乳児期の父親からは「まだ生まれたばかり」「産まれたばかりの子なのでそのような感情はまだ抱いていない」「まだ里帰りで会いに行った時も1人目が赤ちゃん帰り（返り）でなかなか2人目と遊んであげられないのでそこまでの感情などが芽生えていない」と回答していた。

【わが子を認識し親としての責任を覚える】

この大カテゴリーでは《わが子の特徴と成長を受容する》、《わが子の幸せを願う》、《パートナーの身体を通して胎児を気遣う》、《親である自覚と責任》の4つの中カテゴリーによって構成されていた。

《わが子の特徴と成長を受容する》では〈わが子の成長や反応に感情がわく〉〈わが子の特徴を認識する〉の2つのカテゴリーが含まれていた。〈わが子の成長や反応に感情がわく〉は、全て乳児期の子どもからの父親からの回答によって構成されており、「夜泣きが止まらず辛い 時折見せる表情変化が嬉

しい」や「少し口答えを覚えてきて、時々無性に腹が立つ。可愛くはある。時折、思いやりがあるところを見せる」という回答が見られた。〈わが子の特徴を認識する〉では「感情が豊か、ママ好き、運動能力が高い、気が強い」「言葉が通じない」「よく泣いて大変」「よく笑う」「おしゃべり好き」などの自身の子どもの特徴について回答していた。

《わが子の幸せを願う》では〈何事もなく生まれてきてほしい〉〈健康な人生を歩んでほしい〉の2つのカテゴリーが含まれていた。〈何事もなく生まれてきてほしい〉は胎児期の父親からの回答のみで構成されており、これから生まれてくるわが子に対して「元気で生まれてきてほしい」「健やかに生まれてきてほしい」といった回答が得られた。また「初めての子供なので元気で生まれてくれれば特に何もない」や「第二子とにかく元気で産まれて欲しい」というように、初産であっても経産であっても子どもが無事に出生することを望んでいた。さらに「とりあえず元気な姿で産まれてきてほしい。身体的なハンデを持たない健全な子」とあるように、健康や元気に生まれてほしいというだけではなく、身体的な障害を持たずに生まれてきてほしいという回答も見られた。〈健康な人生を歩んでほしい〉では、胎児期・乳児期それぞれの父親からの回答が得られており、「健康で元気に育てて欲しい」や「将来大人になるまで病気などをせず、何事もなく育ててほしい」といったように自身の子どもの健康で過ごしていけることを望んでいた。また「何事にも効率的にかつ役に立つ事を学び、教育の実施をしたい。（育児に対しては大変そうで、まだ実感が湧かないのでなんとも言い難い）」や「人とは比べず元気で真っ直ぐな人に育ててくれたら良い」「おてんとさんをまともに仰げないようなことが無ければ、自由でいい」といったように、単に健康に健やかに成長をするだけではなく苦労なく成長してほしいという思いも見られた。

《パートナーの身体を通して胎児を気遣う》では〈パートナーの身体の変化を通じた気づき〉〈母子の

健康を願う」の2つのカテゴリーが含まれていた。〈パートナーの身体の変化を通した気づき〉は、「つわり」や「つわりがひどい」など、妊娠によって見られるつわりなどのパートナーの身体の変化を通して、胎児がいることに気づくと同時に、〈母子の健康を願う〉では「第一子ということもあり、母子共に健康であることだけを考えている」「母子共に健康で産まれてきて欲しい」と母子の健康を願う回答がみられた。

《親である自覚と責任》は、〈不安〉〈親としての在り方を考える〉〈父親としての役割・責任〉〈自分とわが子のつながりを感じる〉の4つのカテゴリーで構成されていた。〈不安〉では、「不安」や「健康なのかどうかが一番気になっている」「自分がきちんと育てられるかという不安」という回答が見られた。〈親としての在り方を考える〉では、全て胎児期の父親からの回答で構成されており、「誠実」や「平等に接するように心掛ける」「自身や兄弟が男子ばかりなので、女子を希望。可愛がり過ぎて過保護になり、わがままに育てないように要注意」といったように、自身の子どもへの接し方について回答が見られた。同様に、〈父親としての役割・責任〉では「凄く守らなきゃという責任感が芽生えた」「辛い思いをさせてあげたくなく、護ってあげたい」と親として子どもを守る責任を感じ、「しつけ」「その能力を伸ばせる環境づくりをしてあげたい」「教育習い事 勉強」といったように父親として子どもを教育する責任をあらわす回答が見られた。〈自分とわが子のつながりを感じる〉では、「寝相が一緒」と外見的なわが子との共通点や、「何を考えているかだいたいわかる」といったように心理的なつながりを見出している回答も見られた。また「まだ妊娠がわかったばかりなのであまり実感が湧かないが、自分の子どもが妻のお腹の中にいるということはとても感動的」というように、未だ見ぬ子どもに対して実感はわかなくても、子どもの存在自体に霊的な感覚を馳せており、「かわいい。無邪気。将来を感じる 自分の分身に近いような、これから全てを渡

していく存在」とわが子を自分の分身として捉えている回答が見られた。

【愛情と喜び】

この大カテゴリーでは、《期待と喜び》、《愛おしく思う》、《唯一無二の存在を感じる》の3つの中カテゴリーで構成されていた。

《期待と喜び》には〈会える日をまちわびる〉〈わが子の性別に基づく期待〉〈わが子のイメージを描く〉〈誕生への喜び〉〈楽しみ〉〈嬉しい〉〈希望〉の7つのカテゴリーが含まれていた。〈誕生への喜び〉のみ乳児期からの父親の回答によって構成されており、それ以外のカテゴリーは全て胎児期の父親の回答によって構成されていた。自身の子どもに対して期待や楽しみ、嬉しさを抱えているが、「今まで子供は嫌いではなかったが接し方が分からずとても苦手に感じていた。今はパートナーが妊娠していて体の変化とともに自分の子供に早く会いたいと思うようになった」というように、パートナーの妊娠によって子どもに対する考え方や捉え方が変化し、会いたいという思いを抱くようになった回答も見られた。

《愛おしく思う》は〈かわいい〉〈大好き〉〈愛おしい〉〈愛〉の4つのカテゴリーで構成されていた。〈かわいい〉に該当する回答は、約8割が乳児期の父親からのものであり、「かわいいが第一子より新鮮さはない」のように、他のきょうだい児と比較した思いや、「かわいい、やんちゃで手が焼ける」「かわいい、髪の毛が多い」と、児の特性や外見を肯定している回答も見られた。また「かわいいのはあたりまえ」といったように父親としてかわいいと感じることは当然であるといった回答も見られた。また〈愛おしい〉では「かわいい、健気」「愛情、保護」と、直接的には愛おしいという表現はしていないものの単にかわいいや愛情という表現ではなく、健気や保護といった慈しみの愛おしさを表現している内容も含まれた。

《唯一無二の存在を感じる》には〈幸せ〉〈わが子

は特別〈かけがえのない存在〉の3つのカテゴリーで構成されていた。〈わが子は特別〉のカテゴリーには「自分の子供はかわいすぎる」「自分の子はかわいい」「我が子はかわいいと思います」「自分の子供が一番かわいく見える」と自分の子どもだからかわいいと表現しているものが含まれた。これは単にかわいいという感情ではなく、自身の子どもであるために、他とは異なる特別なかわいさを感じていると判断した。また〈かけがえのない存在〉では「命より大事」「本当に大事でなにものにもかえられない」「大切な人」「失いたくない」「誰よりも大切な宝物」「無条件に愛せる存在」と、代えの効かない特別な存在であると感じている回答がみられた。

IV. 考 察

父親のボンディングを構成する語句の自由記述によるカテゴリー化を実施した結果、26のカテゴリー、8の中カテゴリー、3の大カテゴリーに分類された。本論文では、日本の父親における胎児期および乳児期のボンディングの構成概念を明らかにするという本研究の目的に基づき、得られた3つの大カテゴリー【わが子の認識と自分ごととして捉えることの難しさ】、【わが子を認識し親としての責任を覚える】、および【愛情と喜び】を基盤として、それぞれの特徴と臨床的・理論的な示唆について考察する。

日本の父親の胎児期・乳児期のボンディングは、〈かわいい〉と〈特にない〉の2つのカテゴリーに最も多くの回答が含まれていた。この〈かわいい〉と〈特にない〉といったポジティブな要素とネガティブまたはネガティブな感情がまだ発生していないニュートラルな要素が同程度の割合で含まれていたことは、日本の父親のボンディング構成要素の大きな特徴であると言える。このポジティブとニュートラルな感情の併存は、先行研究の結果とも矛盾しないと考えられる。例えば、妊娠期のパートナーを持つ父親を対象としたオーストラリアの研究では、父親のボンディングの説明はたいていシンプルで肯

定的なものであるが、生理学的に父親は乳児にとって『役に立たない存在である』と感じたり (Brady, et al., 2017), また、授乳などの場面において父親自身が『子どもとの距離を感じている』という結果が示されていたりと (de Montigny, et al., 2018), 父親のボンディングではニュートラルな要素も含まれると報告されている。本研究で認められた〈特にない〉という感情はこれらの先行研究の結果とも関連が示唆される。また、父親のボンディングは、父親が乳児に向けるプロセスを反映するものであり (Crouch, Manderson, 1995; Kerstis, Aarts, Tillman, et al., 2016), 父親が子どもに対して愛着を持つ独自のプロセスとその関係性である (Taubenheim, 1981) と定義されており、このプロセスは父親と児との相互作用を通して発達していくものであるとも述べられている (Figueiredo, et al., 2007; Furukawa, et al., 2020)。母親が自身の身体変化を通して子どもを実感できるのに対し、父親は身体変化がなく、パートナーの身体変化や妊婦健診時のエコー画像などの視覚的情報を通して初めて子どもを認識することが明らかになっている点も重要である (Suzuki, et al., 2022)。

本研究で多数見られた〈特になし〉や〈まだ実感がない〉といった回答は、大カテゴリー【わが子の認識と自分ごととして捉えることの難しさ】に含まれており、父親がわが子を認識し、自分ごととして捉えることへの困難感を示していると考えられる。特に胎児期の父親は、生理的变化を伴わないことから、わが子への実感を得ることが難しく、その困難さが言語化されていた。これは、子どものイメージが湧きにくく、実際の相互作用がなければボンディングが形成されにくい可能性を示唆している。多くの父親が「特別な感情がわからない」と回答していた。本研究の結果は、胎児期から児への実感を高めるような積極的な関わりを支援として提供していく必要性を強く示している。一方で、「まだ妊娠がわかったばかりなのであまり実感が湧かないが、自分の子どもが妻のお腹の中にいるということはとても感動

的」というように、未だ見ぬ子どもに対して実感を感じることがないが、子どもの存在自体に思いを馳せている回答や、「かわいい。無邪気。将来を感じる 自分の分身に近いような、これから全てを渡していく存在」というように、わが子に自身の分身としてのつながりを感じ、父親として自身の子どもに対して役割や責任を全うしていきたいという思いを表す回答もみられたことから、早期段階でわが子に対する特別な思いを抱くことも明らかになった。

また父親のボンディングを構成する要素の特筆すべき点として【わが子を認識し親としての責任を覚える】【愛情と喜び】の2つの大カテゴリーが挙げられる。【わが子を認識し親としての責任を覚える】では、《親である自覚と責任》の中カテゴリーにも〈父親としての役割・責任〉が含まれており、父親としての自覚と責任が芽生えることも父親のボンディングの構成要素の重要な一側面を担っていると考える。またこの役割・責任には、「しつけ」「その能力を伸ばせる環境づくりをしてあげたい」「教育習い事 勉強」といったように父親としての役割を考えていることで子どもへの特別な感情を抱いていることや、「凄く守らなきゃという責任感が芽生えた」とあるように、単に父親としての役割を全うするというだけでなく、「辛い思いをさせてあげたくなく、護ってあげたい」のように、わが子の辛い思いを、自分の辛さとして感じ、子どもを『護りたい』という特別な感情を抱いていることも窺える。さらに、〈不安〉もこの中カテゴリー内には含まれている。これは今までは我が子の認識が薄く、自分ごととして考えることができなかった父親が、生まれてきたわが子に対して親しみや護ってあげたいという親密さを実感することで、父親自身が父親としての自覚と責任を覚えるからこそ、父親としての責任感を全うしていく不安が生じてくるものであると考えられる。

現在ボンディングを測定する尺度として使用されている Japanese version of Mother-to-Infant Bonding Scale Japanese version (MIBS-J) は、「赤ちゃんを

守っていると感じる」「赤ちゃんに親しみを感じる」「赤ちゃんに愛情を感じる」からなる、母親の赤ちゃんに対する積極的な愛情や親密さの欠如、すなわち『愛情の欠如』と、「赤ちゃんに何かしてあげなければならないとき、怖くなったりパニックになったりする」「赤ちゃんに怒りを感じる」「赤ちゃんに憤りを感じる」「赤ちゃんがもっと違っていたらと思う」の3項目からなる、母親の赤ちゃんに対する怒りや拒絶を反映している『怒りと拒絶』の2つの因子から構成されている (Yoshida, Yamashita, Conroy, et al., 2012)。本研究により【わが子を認識し親としての責任を覚える】の大カテゴリー、そしてそれに含まれる『親としての役割・責任』という、最も一般的なボンディングの測定法には含まれていない、父親に特異的な構成概念が明らかになったと示唆される。【愛情と喜び】では、ポジティブな感情の中にも、単純にかわいいという感情だけでなく、〈わが子の性別に基づく期待〉〈会える日をまちわびる〉〈楽しみ〉〈希望〉〈幸せ〉のような、父親の多様で豊かなポジティブなボンディング感情が明らかになった。「今まで子供は嫌いではなかったが接し方が分からずとても苦手感じていた。今はパートナーが妊娠していて体の変化とともに自分の子供に早く会いたいと思うようになった」と述べられていたように、実感とともに、豊かなポジティブなボンディング感情がわいてくることも父親のボンディングの特徴であるとも考えられる。この特徴を理解し、父親のボンディングの構成概念をふまえたアセスメント手法の開発や、父親のポジティブなボンディングが芽生えるプロセスを支援する妊娠期からのかわり方が重要になってくると考える。

以上のことから、父親のボンディングには特有のボンディングの構成概念と獲得のプロセスが存在していることが明らかになった。この特徴を理解し、父親のポジティブなボンディングが芽生えるプロセスを支援する妊娠期からの関わりが重要になってくると考える。

V. 本研究の限界

今回のアンケート回答者の学歴を見ると、全体のおおよそ2割の父親が修士または博士課程の修了者であり、世帯年収もおおよそ2割が1000万円を超えている。親の行動と家庭環境と最終学歴（坂本, 2009）、父親の職種と年収、最終学歴との関係（上田, 2015）も明らかにされているように、高学歴な親ほど、自身の養育環境が良好であったり、わが子への教育に関して意識が高かった可能性がある。そのため本研究の結果は、日本の一般的な父親集団の結果とは言い切れない可能性もある。

また今回は、アンケート調査の自由記述であったため、記載されたキーワードだけではその脈絡や意図が把握できなかったものもある。今後はアンケートによる自由記載だけではなく、インタビュー調査を併用することで、より父親の提示したキーワードの真意を確認することができ、より言葉の意味を吟味し父親のボンディング構成要素の概念を構築することが可能になると考える。

さらに、今回のデータは夫婦ではない男女それぞれから収集しており、夫婦-子の三者関係になっていない。しかしながら、父親からのデータを分析していることで、男性が父親になっていくプロセスならびに家族成員である父親と子どものボンディングを通して家族となっていくプロセスへの示唆を得ることもできた。そのため、今後は母親を対象にした同様の研究結果との比較や、夫婦-子の三者関係を考慮したデータ収集と分析を行うことで、より家族をシステムとして捉えたボンディング構成要素を吟味することが可能になると考える。

VI. 結 論

本研究の結果から、日本の胎児期・乳児期の父親のボンディングでは、〈特にない〉や〈まだ実感がない〉などの【わが子の認識と自分ごととして捉えることの難しさ】を抱えていることや、〈親である

自覚と責任〉に代表される【わが子を認識し親としての責任を覚える】、〈かわいい〉〈期待〉〈希望〉〈幸せ〉といった、単純ではない【愛情と喜び】の3つの中核的な構成概念によって説明されることが明らかになった。母親に比べて実感がわきにくい、特異的な側面がある父親ならではのボンディングとその獲得プロセスを理解し、胎児期から早期支援を行い、父親のボンディングを促進していく必要性が示唆された。

利益相反

本研究に関して著者らが開示すべき利益相反事項はありません。

謝 辞

本研究はJSPS科研費JP21K10833の助成を受けて実施した。貴重な意見を提示くださった調査参加者の皆様に深謝申し上げます。

各著者の貢献

DSは研究の構成とデザイン、データ収集、データ分析と解釈、論文の執筆ならびに研究全体のプロセスを担当した。YOは研究の構成、データ分析と解釈、研究全体のプロセスに対する助言、ならびに論文への示唆を行った。MGはデータの分析と解釈、論文への示唆を行った。また著者らは研究のあらゆる内容に対し、正確性や整合性に関する疑問が適切に調査され解決されることに責任を持つ、研究全ての面に対しての責任説明があることに同意し、最終原稿への最終承認を実施した。

〔受付 25.01.19〕
〔採用 25.11.10〕

文 献

- Bengtsson M.: How to plan and perform a qualitative study using content analysis, *NursingPlus Open*, 2: 8-14, 2016 doi:10.1016/j.npls.2016.01.001
- Brady M., Stevens E., Coles L., et al.: 'You can spend time ... But not necessarily be bonding with them': Australian fathers' constructions and enactments of infant bonding, *Journal of Social Policy*, 46(1): 69-90, 2017 doi:10.1017/s0047279416000374
- Condon J. T.: The assessment of antenatal emotional attachment: Development of a questionnaire instrument, *British Journal of Medical Psychology*, 66 (Pt 2): 167-183, 1993 doi:10.1111/j.2044-8341.1993.tb01739.x

- Condon J. T., Corkindale C. J., Boyce P.: Assessment of postnatal paternal-infant attachment: Development of a questionnaire instrument, *Journal of Reproductive and Infant Psychology*, 26(3): 195-210, 2008 doi:10.1080/02646830701691335
- Crouch M., Manderson L.: The social life of bonding theory, *Social Science & Medicine*, 41(6): 837-844, 1995 doi:10.1016/0277-9536(94)00401-E
- de Montigny F., Larivière-Bastien D., Gervais C., et al: Fathers' perspectives on their relationship with their infant in the context of breastfeeding, *Journal of Family Issues*, 39(2): 478-502, 2018
- Figueiredo B., Costa R., Pacheco A., et al: Mother-to-infant and father-to-infant initial emotional involvement, *Early Child Development and Care*, 177(5): 521-532, 2007 doi:10.1080/03004430600577562
- Furukawa R., Driessnack M., Kobori E.: The effect of video-mediated communication on father-infant bonding and transition to fatherhood during and after Satogaeri Bunben, *International Journal of Nursing Practice*, 26: e12828, 2020 doi:10.1111/ijn.12828
- Habib C., Lancaster S.: The transition to fatherhood: Identity and bonding in early pregnancy, *Fathering: A Journal of Theory, Research, and Practice about Men as Fathers*, 4(3): 235-253, 2006 doi:10.3149/fth.0403.235
- Habib C., Lancaster S. J.: The transition to fatherhood: The level of first-time fathers' involvement and strength of bonding with their infants, *Journal of Family Studies*, 11(2): 249-266, 2005 doi:10.5172/jfs.327.11.2.249
- Kerstis B., Aarts C., Tillman C., et al: Association between parental depressive symptoms and impaired bonding with the infant, *Archives of Women's Mental Health*, 19(1): 87-94, 2016 doi:10.1007/s00737-015-0522-3
- Klaus M. H., Kennell J. H. / 竹内 徹, 柏木哲夫, 横尾京子 訳, 親と子のきずな : 1-2, 医学書院, 東京 (1982/1985)
- Krippendorff K.: Content analysis: An introduction to its methodology, Sage Publications, Thousand Oaks, CA, 2018
- Noh N. I., Yeom H.-A.: Development of the Korean Paternal-Fetal Attachment Scale (K-PAFAS), *Asian Nursing Research*, 11(2): 98-106, 2017 doi:10.1016/j.anr.2017.05.001
- Ohashi Y., Sakanashi K., Tanaka T., et al: Mother-to-infant bonding disorder, but not depression, 5 days after delivery is a risk factor for neonate emotional abuse: A study in Japanese mothers of 1-month olds, *The Open Family Studies Journal*, 8(1): 27-36, 2016 doi:10.2174/1874922401608010027
- 坂本和靖 : 親の行動・家庭環境がその後の子どもの成長に与える影響, 季刊家計経済研究, Summer (83): 58-77, 2009
- Suzuki D., Ohashi Y., Shinohara E., et al: The current concept of paternal bonding: A systematic scoping review, *Healthcare*, 10(11): 2265, 2022 doi:10.3390/healthcare10112265
- Taubenheim A. M.: Paternal-infant bonding in the first-time father, *Journal of Obstetric, Gynecologic & Neonatal Nursing*, 10(4): 261-264, 1981 doi:10.1111/j.1552-6909.1981.tb00856.x
- 上田 衛 : 親の経済力と教育格差, 鶴見大学紀要, 52: 27-32, 2015
- Weaver R. H., Cranley M. S.: An exploration of paternal-fetal attachment behavior, *Nursing Research*, 32(2): 68-72, 1983
- Wittkowski A., Vatter S., Muhinyi A., et al: Measuring bonding or attachment in the parent-infant-relationship: A systematic review of parent-report assessment measures, their psychometric properties and clinical utility, *Clinical Psychology Review*, 82: 101906, 2020 doi:10.1016/j.cpr.2020.101906
- Yoshida K., Yamashita H., Conroy S., et al: A Japanese version of Mother-to-Infant Bonding Scale: Factor structure, longitudinal changes and links with maternal mood during the early postnatal period in Japanese mothers, *Archives of Women's Mental Health*, 15(5): 343-352, 2012 doi:10.1007/s00737-012-0291-1

Explanatory Research on Paternal Bonding Constructs in a Japanese Setting

Daichi Suzuki^{1)*} Mami Gomi^{2) 3)} Yukiko Ohashi^{4) 5)}

1) Department of Nursing, Faculty of Health & Medical Sciences Kanagawa Institute of Technology

2) Faculty of Nursing, Kawasaki City College of Nursing

3) Graduate School of Kawasaki City College of Nursing

4) Faculty of Nursing, Josai International University

5) Graduate School of Health Sciences, Josai International University

*Present Graduate School of Nursing Science, St. Luke's International University

Key words: paternal bonding, constructive concept, content analysis

This study investigated the conceptual structure of bonding among Japanese fathers during the prenatal and infant stages. While bonding research has primarily focused on mothers, paternal bonding remains underexplored, often relying on maternal frameworks that lack consistency in definitions and measures. Using an online survey, we collected free-text responses from 180 Japanese fathers with pregnant partners or children under two and conducted content analysis. Three main categories emerged: (1) Difficulty recognizing the child-related matters as my own, (2) Responsibility as parents, and (3) Love and joy. Many fathers reported a lack of emotional realization, such as “no particular feelings yet,” while others expressed positive aspects like “responsibility as a parent” and “affection.” These findings suggest paternal bonding follows a unique process distinct from maternal bonding, emphasizing the need for early support and father-child interaction initiatives. This study highlights paternal-specific components, offering insights for tailored support strategies.